

幻の城・太平寺城

昭和三十八年、伊吹山の中腹にあるひとつの集落が、惜しまれながらその歴史を閉じました。集落の名は「太平寺」。麓の集落から約2キロの山道を登った標高約450m地点にある、まさに天空の村です。

集落の歴史は伊吹四護国寺のひとつ太平寺とともにあります。宝亀九年（778）の開基と伝えられ、仁寿年間（851～4）には僧三修によって山岳修行の道場となり、国家公認の寺に昇格しました。

仁治二年（1241）近江守護佐々木信綱は、4人の息子に所領を分配し、愛知川以北の北近江六郡を与えられた四男氏信が京極氏を名乗ります。氏信は柏原（山東町）に館を設け、太平寺に城郭を構えたといわれています。

元弘三年（1333）、龜山天皇の子・五辻の宮が、太平寺から全国に反幕府の指示を出し、寺の僧兵とともに米原町番場で北条仲時一行を襲撃して鎌倉幕府を滅亡へと導きました。この時、京極高氏（尊誉）も反幕府方につき、以後室町幕府の重鎮として活躍することになります。

現在の集落跡はセメント鉱山の中にあり、一般の立ち入りは禁止されています。氏神太平神社跡地から南に下

[伊吹町]

る中央道路の左右に削平地が展開し、「円蔵坊」「仲之坊」「上樂坊」などの寺坊名が散見されます。

一説に城跡は神社山手の高台にあったといわれますが、現地で明瞭な城郭遺構は確認されていません。山岳寺院を利用した南北朝期の城郭であったと考えられます。

（高橋順之）



▲太平寺集落風景（昭和30年代）

情報 BOX

- ◆米原町教育委員会では、下記の書籍を刊行しました。
『米原町史 通史編』（販価6,000円）
※平成15年10月31日まで発刊記念価格5,000円です。
- ◎問い合わせ先
米原町教育委員会 TEL.0749-52-6632
- ◆伊吹町教育委員会では、下記の文化財報告書を刊行しました。
『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ上平寺城跡』
(第17集)
※京極氏の山城跡の測量調査の報告です。
- ◆伊吹町立伊吹山文化資料館では、下記の図書を刊行しました。
『伊吹山文化資料館年報4』
※香川県伊吹島の調査レポートを掲載しました。
- ◆伊吹山文化資料館では、10月13日から11月24日まで、下記の企画展を開催します。
第34回企画展『近江戦国の城下町・上平寺』
※発掘調査の速報展です。
- ◎いづれも問い合わせ先
伊吹山文化資料館 TEL.0749-58-0252
- ◆山東町立柏原宿歴史館では、下記の企画展を開催します。
『旅と浮世絵 一広重が描いた西美濃と近江中山道の今昔一』
期間：10月29日～11月24日
- ◎問い合わせ先
柏原宿歴史館 TEL.0749-57-8020

◆◆編集後記◆◆

先般、NとKとTは中国東北地方へ行ってきました
■果てしなく広がるトウモロコシ畑に、かつて荒波を越えて日本へ往来した渤海使を思い■長春の青空の下にそびえる白亜の天守閣に呻き（これは旧関東軍司令部）■巨大な好太王碑に驚きつつも、撮影禁止に怒り■これでもかと出てくる水餃子の山に閉口しながら■日本とのかかわりの深さと偉大な中華思想？を体験してきました■話は変わりますが、伊吹町では、10月19・20日にシンポジウム『京極氏の城・館・庭園』を開催します■そのため、今回は京極氏を特集しました■郡内の担当者の皆さんには両日ともいろいろとお仕事をお願いします■「佐加太」の執筆者全員が揃うのもなかなかありません。顔見がてらシンポにおこしください。（四つ目結）

坂田郡文化財ニュース

佐 加 太 第17号

発行 平成14年10月15日
編集 坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局 〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照37
伊吹町教育委員会生涯学習課
TEL. 0749(58)1121
印刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

たてほりぐん 放射状の堅堀群を確認－上平寺城（桐ヶ城）跡－

第17号

特集：京極氏と坂田郡

2002年10月15日

滋賀県坂田郡社会教育研究会

文化財部会

[伊吹町]

京極氏の山城・上平寺城跡は伊吹山より南へ派生する刈安尾と呼ばれる尾根の先端にあります。京極高清が一族の京極材宗と講和した永正三年（1505）頃に、京極家の総領として築いたものと考えられます。

平成十二・十三年度に地形測量を行いましたので、今回は、その結果を紹介したいと思います。

図のように標高669.0mの山頂に主郭Iを置き、その南に曲輪III・IV・VI・VIIが続きます。それぞれの曲輪間に堀切や堅堀が配置され、防御性を高めています。

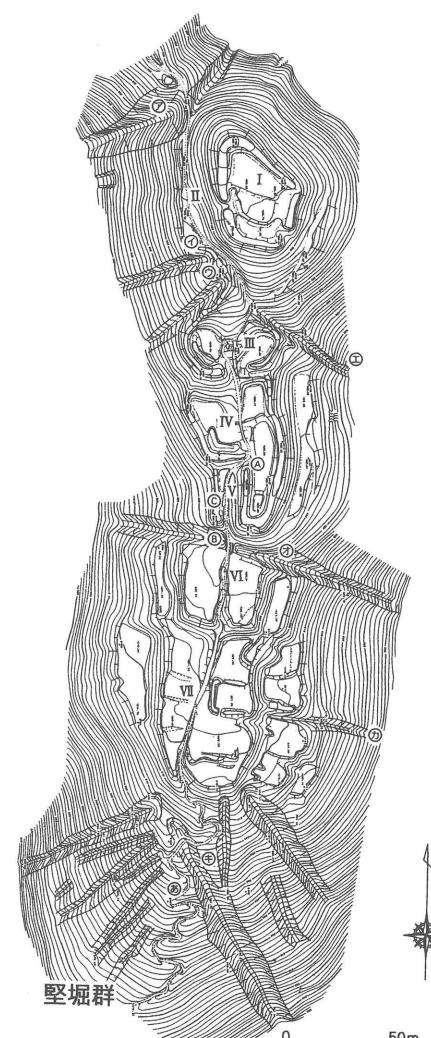
主郭Iや曲輪III・IVの周囲には土塁がめぐらされており、とくに、曲輪IVの土塁は高くて厚いものです。また、南方からIVの虎口④に至には、堀切④と外枠形空間Vを通過しなくてはならず、曲輪IVの土塁から常に横矢がかかるとともに、正面の土塁からの攻撃にもさらされることになります。しかも、西側にも土塁があるために敵は縦列でしか攻められません。

ここが、上平寺城一番の見どころといわれている遺構です。

今回の測量調査では、この城最大の曲輪VIIの南端斜面で、放射状の堅堀群④を確認しました。堅堀群の存在については、いびつながらもこれまで報告されてきましたが、今回の調査で、11条からなる堅堀が南端斜面をほぼおおって、屋根の先端防御がしっかりとおこなわれていることがわかりました。最も大きい堅堀は上場の最大幅が約15m、深さ約4mを測り、その延長は100m以上にもおよび、その姿に圧倒されます。



▲堅堀跡



▲上平寺城跡測量図

坂田郡の天然記念物⑤

【国指定特別天然記念物】オハツキイチョウ



▲オハツキイチョウ

米原町醒井の了徳寺境内にイチョウの雌株があります。樹木周り4メートル、樹高約20メートル、樹齢推定166年の大木です。

このイチョウの銀杏は毎年ほとんど正常なものがつきますが、一部に葉面上に生ずるものがあります。葉面上の銀杏は発育不良のものが多く、大半が小形で、楕円形を呈しており、ふつうの銀杏とは著しく形状が異なっています。その形状から、オハツキイチョウと呼ばれ、昭和四年(1929)12月17日、国の天然記念物に指定されました。

イチョウは雌雄異株であるため、オハツキイチョウには雄株で葉辺に薬をつけるものと、雌株で種子(銀杏)を葉面上か葉縁につけるものがあります。雄株のオハツキイチョウは山梨県身延町の宮前神社のものだけで、他はすべて雌株に種子がつくものです。

ところで、なぜオハツキイチョウの葉に種子(銀杏)がつくようになったかについては、老木になると生ずる現象、樹勢の旺盛な木に生ずる現象、先祖返りの現象、形質遺伝現象、病的・奇形で生じた現象とする説などがありますが、そのいずれなのかについてはまだ明らかにされていません。

(中井 均)

血染めもみじ－清滝寺徳源院－

京極氏は鎌倉時代中期に六角氏や大原氏、高島氏とともに四流に分れた近江源氏佐々木氏の一流で、幕末まで存続した名族として著名です。歴代当主には、バサラ大名の異名をとった5代導誉や関ヶ原合戦の影の功労者19代高次などを輩出し、歴史の表舞台に立ってきました。

その京極氏の本拠である「柏原館」の付近に菩提寺として建立されたのが、山東町の清滝集落の最奥部にあります清滝寺徳源院です。丸龜藩主22代高豊が寛文十二年(1672)に現在の境内に整え、38基の歴代の墓(宝篋印塔)が整然と並ぶ国史跡の京極家墓所、県指定の三重塔や庭園などが整備されました。また境内には、導誉がお手植えしたとされる樹齢300年の“導誉桜”などがあり、さながら文化財の宝庫と言えます。

毎年11月23日頃に、近くの中山道の宿場であった柏原を中心に、“紅葉ウォーク”が開催されます。その頃の徳源院はもみじが綺麗に紅葉し、中でも庭

[山東町]

園付近のもみじは血に染まったような色合いを魅せ、庭園の緑と血染めのもみじとの妙が時も経つても忘れさせてくれるほどです。百聞は一見にしかず! 晩秋の山東町をお楽しみください。

(桂田峰男)



箕浦城

[近江町]

近江町を流れる天野川の河口には、古代より湖上交通の要衝・朝妻港(現米原町)があり、箕浦に至る水路で中山道の陸運と連なっていました。

箕浦庄の北部をしめる後鳥羽御影領は、鎌倉時代には箕浦氏が地頭に補されたことで知られています。箕浦氏が室町時代に京極導誉によって柏原(現山東町)に移封された後は、京極氏の披官である「今井氏」の祖がこの地の地頭に補せられて箕浦に住まいし、天野川流域に堀・顔戸・今井・安食・岩脇・若宮・林・寺倉・広田・新庄・井戸村等の庶流を広げ国人領主に成長しました。

箕浦城遺跡は、近江町箕浦と、隣接する新庄の集落との境に所在する平城の遺跡です。集落の北端から農耕地に続く一帯の地籍は、周辺条里とは異なった様相を示し、殿城を中心に区画水路が取り巻き、一部は通船川の様相をとどめています。

平成元年(1989)に実施された箕浦城周辺の発掘調査では、堀・溝・建物・柱穴・土壙・墓など多岐にわたる

遺構と、土器・漆器・錢貨・柱根などの遺物が発見されています。

京極氏の根本披官「今井氏」については、家臣の嶋氏が残した『嶋記録』に詳しく、天文六年(1537)から天正元年(1573)の間の今井氏の動向を知ることができます。天野川流域一帯を押さえるために在地領主制を敷いていたことが明らかにされています。(宮崎幹也)



▲箕浦城の現状

京極氏が法華経を収めた寺－青岸寺－

[米原町]

国道8号線より一步東側を平行に走っているのが北国街道で、大字米原はその宿場町でした。この米原宿の最奥部、太尾山の山麓に位置するのが青岸寺です。

青岸寺の創建は詳らかではありませんが、元来は不動山米泉寺と称し、伊勢正法寺の末寺でした。延文年間(1356~61)、京極導誉が法華経八巻を書写し、その最後の一巻を米泉寺に収め、武運長久の祈願所としました。最後の巻は太尾と称することから不動と音訓が相通じるため、不動山を改めて太尾山としたと伝えられています。

さらに導誉は寺の背後に城を築き、「阿房舍四方隨樓」と名付けたとも伝えられています。現在残る太尾山城跡の前身の城郭であろうと考えられます。

永和元年(1375)、六角氏頼が立ち寄りますが、その荒廃ぶりに驚き、修築を開始します。そして自身の念持仏であり、戦時のときにも旗竿の裏に納めていた八寸の聖観音を本尊の胎内に安置しました。こうした逸話から青岸寺の本尊は腹籠の觀音、旗竿の觀音と呼ばれるようになりました。

本尊の聖観音菩薩坐像は胎内の墨書銘から永和二年に讃岐法眼堯尊の手によって造立されたことがわかります。

この造立が寺伝にある六角氏頼の修理の翌年に相当することから、氏頼との関わりは単なる寺伝ではないようです。現在、本尊は町の文化財に指定されています。

(中井 均)

